◇紙碑◇

阿部郁子さんの冥福を祈って

阿部さんが癌であること，しかも発見が遅れて回復の可能性がきわめて少ないということを知ったのは昨年7月中旬でした。5月に第三子春子ちゃんを無事出産されたということを伺っていただけにまさに青天の霹靂でした。癌に対する恐怖は抱きながら，それはずっと年輩の方のものと考えていた私には，クラスメートの病を自分のものと混同してしまう程の惑乱でした。

病気が何かを知ってしまった私は，お見舞して励ましてあげたいという気持ちと，核心にふれることの出来ない会話，表情，仕草に自信がなく，一日のばしにし，いたづらに日を過ごしてしまいました。病室での話題を心に決め，覚悟して病院を訪ねたのは7月も末でした。もともと小柄で，ほっそりとした体でベッドに臥せている阿部さんは，大患とも思われぬ程お元気そうで，それほどはやつれた様子も見えず，少女のように髪を長くのばして笑顔で私を迎えてくれました。

「お医者様が，近来まれに見る栄養失調症で，ビアフラでの症例を日本で見るとは珍しいとおっしゃるの。胎児に全ての栄養が吸収されて，母親はまるでもぬけの殻同然なんですって。今コバルトを照射して治療して下さっているけれども，産休の終る夏休み中に回復するのは難しいとのお話で，子供は主人が何とかみてくれているから心配はないけれど，学校の事が一番心配なの。産休を3回もとって，しかも更にそれ以上に休ませていたゞくので同僚の先生方に迷惑ばかりかけてしまって。」一瞬全てを知りながら，むしろ私に気を遣って明るい見通しを話してくれているのではないかと錯覚した程でした。僅かの面会時間でしたが，お子さん達のことは殆んど口にせず，頻りに職場のことを心配していました。

国際婦人年とやらで，婦人の地位の向上が抽象的にとりあげられていますが，女性が職業を持ち，家庭生活とを両立させていくことの可否は，大凡個人的に恵まれた条件があるか否かにかかっているような現状が，大病を患う彼女に家族のことは口にさせず，常に職場への配慮をさせたと考えるのはうがちすぎでしょうか。その後，二，三度病室を訪ねましたが病状の悪化する中で僅かの面会しか許されなかったのですが終始職業人としての真面目な人生観に貫かれた責任感と同僚への配慮のみを口にしていました。三人のお子さんを残されてこの世を去ってしまった彼女の意志を私なども同じ職業人としても継いでいきたいと思います。

永田悦子さんを卒業後間もない２３才の若さで癌で失い，そして又健康に関しては小柄ながらも人一倍自信のあった阿部さんを失ってしまったクラスメートの一人として，ただただ人間のはかなさを感じ死というものを己の問題として直視しなければならないことを痛感しております。

藤本　和代（１１回生）

＊　昭和５０年１０月３０日歿，行年３５